

天狗の棲る地

たくきよしみつ



天狗の棲む地

たくきよしみつ

天狗の棲む地

一九九四年七月二日 第一刷発行

著者——たくきよしみつ

発行者——棚橋芳夫

発行所——株式会社マガジンハウス

東京都中央区銀座3-13-10 〒104-0031
電話 書籍販売部 〇三(三五四五)七二七五
書籍編集部 〇三(三五四五)七〇三〇

印刷所——共同印刷株式会社

製本所——株式会社積信堂

装丁者——芦澤泰偉

ISBN4-8387-0568-9 C0093

©1994 Yoshimitsu Takuki Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍販売部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
定価はカバーと帯に表示してあります。

たくきよしみつ

1955年生。上智大学外国語学部卒。'91年、『マリアの父親』で第4回小説すばる新人賞を受賞、集英社から刊行。著書に『プラネタリアムの空』（小社刊）、『雨の降る星』（集英社文庫）。

カバー写真：松浦和夫

カバーイラスト：西口司郎

天狗の棲む地

東北本線と上越線を結ぶ形で栃木県を横断するローカル線の駅に、一時間に二本しかない列車が到着した。

二両連結の列車からは、地元の学生たちに混じって老人ばかり四人連れの一行が露天のホームに降り立った。

男性が一人、女性が三人。

女性の一人は、ひどく腰が曲がっている。

四人のリーダー格らしい男性は、全員がちゃんと列車から降りたことを確認するように、一人一人の顔を見渡した。

男の名前は茶弥草一郎^{ちやさういちろう}。ただし、連れの女性たちには、茶弥明成^{ちやめいせい}という名で通っていた。

裾の広いグレーのスポンに、たっぷりとした木綿地の法衣^{ほうい}のような上着を着ている。

茶弥に率いられた一行は、駅を出ると線路と数十メートル離れて平行して走る道路を歩き始めた。

時折砂利を積んだダンブカー^{ダンブカー}が通り過ぎる片側一車線

の狭い道を十分ほど歩いていくと、「大岩船山登山口」と書かれた、くたびれた看板が現れる。

「お疲れでしょう。どうぞ休んでいってくださいな」

一行の前に、かっぱう着をはおった中年の女性が飛び出して、腰を少しかがめ気味にしながら声をかけてきた。

茶弥はその女性を見据えると、逆にこう問い返した。

「大岩船山^{おおいわふねやま}の大巖寺^{おおいわのい}は、今でもここから登れますか？」

「ええ、ここが登り口になってます。お参りですか？ 階段がちよっときついですがねえ、ゆっくりと登られれば

いいですよ。ハイ、これがうちで作りましたご案内図。

ええと、ひいふう……四人さんですね」

かっぱう着の女性は、一行が大岩船山参拝の客だと知ると、顔をさらにぱっと明るくさせ、懐から地図と寺の縁起^{えんぎ}などが印刷された案内図を手際よく取り出して各人に配り始めた。

「お参りの後はどうぞうちで休んでってください。田楽や名物の糸切り団子もありますんで。よろしかったらどうぞ……」

女はそう言うのと、軽く会釈をしながら店の中に引込んだ。

店といっても、目立つような看板があるわけでもなく、注意して見ないとただの民家のようにも見える。代わり

にこのおかみの熱心な客引きによつて商売を成り立たせているのだらう。

大岩船山はその名の通り、大きな岩がごろごろしている山である。「岩船」の名は、山が船の形をしていたからとも、古代の神々がそれに乗つて空を自由に飛び回つた「岩船」がこの頂上に発着したからとも言われる。しかし今では石の切り出して山の半分以上は削り取られ、元の形はとどめていない。

昔は名だたる霊山の一つとして数えられていた。頂上にある大巖寺は天狗を祀る寺で、今でも一応は観光スポットになつてゐるのだが、日光や鬼怒川などの大観光地へのルートからは大きく逸れてゐるので、訪れる人は少ない。

頂上までは、八百八十八段あるという長い石段がまっすぐに伸びてゐる。

茶弥が率ゐる老人四人の一行は、その長い石段をゆつくりと登り始めた。

茶弥は大磐舟社という小さな宗教結社の主管をしており、今年六十六歳になつた。

宗教結社といつても法人化はされてゐないし、神社神道などの組織にも属してゐない。茶弥自身も神官の資格を持つてゐるわけではないので「主管」と名乗つてゐる。

大磐舟社は天狗信仰の一種で、歴史は相当古い。かつて日本、いや世界を支配してゐたという高貴な天狗たちを神と仰いでゐる。

しかし、主管を名乗る茶弥のもとにも、明治以前の大磐舟社の正確な記録は残つてゐない。

もともと教典や布教記録を残さぬ、口伝形式の宗教だつたやうで、民間の異端宗教として一時はほとんど消滅寸前にまで追い込まれた。

しかし、明治時代に安居壤滋という男が現れ、教えを見直し、一つの精神哲学として再興させた。

安居師は目立つた布教活動をしたわけではないが、彼のカリスマ性に惹かれて集まる者も多く、新たに「安居教」とでも呼べる集団が形成された。現在の大磐舟社の教典では、安居師は「大磐舟社中興の祖」となつてゐるが、事実上は開祖と言つてもいい。

その教えを弟子が引き継ぎ、茶弥は安居から数えて四代目の主管ということになつてゐる。

大磐舟社の直接の信者は、既に二十人を割つてゐる。

茶弥が時折主催する全国の大磐舟の寺社・霊山詣でに行する人数も年々減り、今ではほとんどこの三人の身寄りのない老女たちだけになつてしまつた。

自分の歳と体力を考えると、布教活動にしても霊山め

ぐりにしても、あとどれくらい続けられるだろうか、茶弥は日増しに寂寞感さびけをつのらせている。

茶弥がこの夏の靈山詣での目的地として選んだこの大岩船山は、山の名前からしても、また天狗信仰という点からしても大磐舟社に関係がありそうなのだが、情けないことにそれを証明するものは茶弥の手元には何も残っていない。

茶弥は過去三回ほどこの地を訪れているが、最後に来たのはもう二十年も前で、周辺の様子などはその当時に比べて随分変わっている。

石段を一段ずつ、ゆっくりと踏みしめながら登ると、大岩船山の垂直に切り立った薄茶色の山肌が次第にはつきりと視界に入ってくる。茶弥が前に来たときよりもさらに大きく削り取られ、痩せ細ったように見える。

「いやあ、しんどいわあ」

茶弥のすぐ後ろから石段を登ってきていた島崎絹江が言った。

「まだ半ばまでもいかんのですよか」

「いや、もう半ばには来てるでしょう」

茶弥は振り返りながら言った。

晴れている日には、遠く新宿の高層ビル群まで見渡せるといふ大岩船山だが、あいにく今日は濃い霧が出てい

て視界はゼロに近い。

「なんだか一雨来そうな感じですねえ」

息を切らした顔を上げて、最年長、六十九歳の三国千代が言った。

確かに雲行きがおかしい。まだ日没までには大分あるのに、かなり暗くなってきた。降られないうちに参拝を済ませ、さっきの茶店で休みたいものだ。

「糸切り団子と言うてましたねえ。うまそうですねえ」

茶弥の心中を読み取ったかのように、いつも元気のいい堀タツノが言った。腰は曲がっているが、体力は四人の中でいちばんある。こうした上り坂などでは、うっかりタツノを先頭に立たせると、みんなあつと言う間においていかれる。

坂の途中に「坂中天狗」と呼ばれる天狗像が祀られている小さなほこらがあつた。

一見して不動尊に似たその顔は、風化して表情までは判別できない。しかし、口が尖とがつているところを見ると烏天狗くわすてんぐらしい。その烏天狗が、なんと狐にまたがっている。遠くから見ると熊にまたがる金太郎のようで、滑稽でさえある。

全体に苔こけむして、時の流れを感じさせる質感がその滑稽さを救っているのだが、あろうことか首から派手なピ

ンク色のエプロンを掛けられ、足元はごく最近流し込まれたと思われるコンクリートでがっちり固められている。

天狗様もひどい扱いを受けているものだと思ひながら、茶弥は両手を合わせて参拝した。

背後で三人の老婆たちも、一斉に天狗像に手を合わせた。

ようやく石段を登りきると、霧の向こうにお化け屋敷のような廃屋が見えてきた。

近づく、かつては茶屋か民宿だったのだろう、崩れかけた土壁に「天狗屋」という屋号が染め抜かれている。覗いてみると、ぼろぼろになった障子や割れたガラス窓越しに、クモの巣の張った食器や家具などが見える。山の上なので、撤去もままならないのだろう。

さらに参道を行くと、巨大な仁王門が四人を迎えた。他に参拝者はいないようで、山頂一带に人の気配は全くない。

本堂を参拝していると、ひととき濃い霧が四人の周りを取り巻き始めた。もう数メートル先も見えない。

「どうしましょうね、先生。奥の院の天狗観音様はこの先なんでしょう？」

タツノが暗に、もう引き返しましょうと懇願するよう

な口調で茶弥に言った。

「うむ……」

茶弥は真っ白な霧に向かって思わず唸った。

ようやく登りきった八百八十八段の石段を、このまま参拝もできずに引き返すのはなんともやるせない。かといって、この視界の悪さでは、これ以上進んだところで、まともに天狗観音の顔も拝めないだろう。

天狗観音というのは俗称で、本当は「金色岩菩薩像」こんじきいわぼさつぞうという。

大岩船山の山頂の北端に突き出した岩の上に建っている石造りの像で、実際は変形の地藏菩薩だろうと推定されるが、表情が穏やかで女性に見えるところから「観音」と呼ばれるようになった。俗称とはいえ、随分いい加減な話ではある。

天狗観音は、大巖寺本堂の奥に秘蔵されている「大天狗像」おおくんぞうと共に、この大岩船山を守る陽と隠の天狗像とされている。

大天狗像は公開されておらず、参拝者は普通この天狗観音のほうを拝むことになる。

茶弥が二十年ほど前に参拝に来たときも、濃い霧に包まれていてよく拝めなかった。今度こそは、と意気込んでいたのだが、またこの霧だ。

迷っているとき、目の前が一瞬暗れて、奥の院の方向を示す矢印看板が見えた。

「とにかくもう少し行ってみましょう。はぐれるといけないから、みんな杖をつないで」

茶弥を先頭に、四人は互いの杖を攜んで一列縦隊になった。二番目が絹江、三番目が千代、しんがりがタツノ。狭い山道や上り坂ではいつもこの順番で歩くことに決めている。日本国中を何度も一緒に参拝旅行をした気心の知れたメンバーだけに、慣れたものだ。

しかし、奥の院までもう少しというところで、一行は再び立ち往生した。

奥の院、つまり天狗観音像が建つ岩場に続く道が封鎖されていたのだ。

「これより先立入禁止」

奥の院への案内表示に従ってここまで来たというのに、なんということだろう。

しかし、鉄柵の向こう側を見ると、この措置も仕方ないかもしれないと思わざるをえなかった。

岩場から岩場へと架けた鉄の橋は錆が浮き、今にも朽ち落ちそうだ。その下は岩がむき出しになった断崖絶壁が続く。この橋が崩れたら、あるいは橋が崩れなくても足を踏み外したら、命はないだろう。

茶弥はそれでも諦めきれずに橋の彼方を見据えた。どこからか、鳥の羽音のようなものが聞こえた。

茶弥は霧のたちこめる頭上を見上げたが、何も見えなかった。

低く、空気をかき回すような、鳥だとしたらかなり大型の鳥の羽音だ。

音は頭上を越えて、天狗観音のある岩のほうへ移動していく。

正体不明の音が消えていく方向にゆっくり視線を動かすと、前方の霧の晴れ間に人影が見えた気がした。

髪の高い、若い女性の姿……しかも驚くべきことに、裸のようだ。

そんな馬鹿な……。

確かめようと目を凝らしたが、すぐに濃い霧が視界を遮った。

「残念ですけどねえ。ここから拝ませていただいて戻りましょう」

千代がほとんど断定する口調で言った。

「そうしましょうかねえ、先生」
他の二人も頷いている。

どうやら彼女たちにはあの裸の若い女の姿が見えなかったらしい。幻覚だったのだろうか、一瞬茶弥は悩ん

だ。しかし、昼間から裸の女の幻を見るほど血氣盛んなつもりはない。確かに見たのだ。

もしかしたら今のは天狗観音様の化身だったのではないか。天狗様が私を呼んでいるのではないか。

「私一人で行ってまいります。みなさんの分もお参りしてきますから、ここで待っておってください」

茶弥は三人に向かって、主管としての威厳を込めた口調で言った。

「いやー、危なかるうがねえ。やめなせえよ、先生」

「立入禁止と書いてありますがね。年寄りはどういうときは素直に従わんと」

「大丈夫。天狗様が呼んでおられる。すぐに戻りますから」

茶弥は彼女たちの制止に耳を貸さず、鉄柵の端の三十センチほどの隙間をすり抜けた。

「やめなっせえ。悪いことは言わんよって、やめなっせえよお」

「大丈夫です。すぐに戻りますからここで……」

茶弥はまるで何かに引き寄せられるように、錆だらけの鉄橋を渡り始めた。

しばらく歩いて振り向くと、年老いた信者たちの姿はもう見えなかった。それどころか、行く手の数メートル

先も見えない。

そりりそりりと進み続けたが、天狗観音の立つ岩場はどこまで行っても現れなかった。二十年前に訪れたときは本堂のすぐ裏手だったような気がしていたのだが……。そのとき、目の前の霧が一瞬晴れて、十メートルほど先の藪の向こうに、さっき見た若い女の姿が、上半身だけだのはっきりと見えた。

黒い髪が肩まで素直に伸び、その下には形のいい乳房がかすかに揺れていた。

幻だろうか？

いや、そんなはずはない。薄い桜色の乳暈にゅううんまで見える。これは幻覚などではない。

しかし、裸の、それも若い女がなぜこんな場所に……？腰から下は藪と、地を這うような霧に遮られて見えないが、まさか幽霊というわけではあるまい。

声をかけようとしたそのとき、再び濃い霧が全ての視界を遮った。

「もし……」

茶弥は女が立っていたほうに向かって声をかけたが、あまりの驚きのためか、かすれ声になっていた。

足を踏み外さぬよう、さらに濃い霧の中を進んだ。足元を確かめるのがやっとなので、歩みは亀のように

のろくなった。

ようやく女が立っていた藪のあたりまでたどりついたときには、既に何の気配もなかった。

「もし……」

再び声をかけたが、返事はない。

さらに進むと、再び鉄柵が現れた。

そこが道の行き止まりだった。

柵の手前に立ち、目を凝らす。

まるでタイミングを見計らったかのように目の前の霧が晴れ、数メートル先に白い石の像が現れた。

天狗観音だ。

天狗と呼ばれるほど鼻が高いわけではない。むしろ鼻筋が通った美人という印象だ。

翼を持ち、斜め上方を仰ぎ見るその涼やかな姿は、隠れキリシタンたちが密かに拝んだマリア観音にも似ている。

しかし、名称やいわれなどはどうでもいい。その穏やかで気品のある顔立ちを見ると、理屈抜きで心が洗われる気がする。

茶弥は反射的に手を合わせた。

数秒後、石像は再び濃い霧に包まれた。

さっきの裸の若い女は、やはりこの天狗観音の化身だ

つたのだろうか。そう思うと、茶弥の身体を、えも言われぬ感動が駆け抜けた。

遠くで雷鳴が轟いた。

気がつくとも身体中がじつとりと濡れている。霧の中に、いつの間にか密度の濃い細かい雨が混じっているようだ。そのとき、今渡ってきた鉄の橋の向こうから突然物凄い叫び声が聞こえてきた。

獣のような、あるいは物の怪^けのような……。

茶弥は我に返り、振り向いた。

信者たちを残してきたあたりから聞こえた気がする。

一体何が起こったのか？

一瞬とはいえ天狗観音の顔を拝み、安らかになつていた心に、急速に不安が拡がっていった。

茶弥は足早に今来た道を引き返した。

霧は少しずつ晴れてきているようだったが、代わりに雨が本降りになりそうだった。

鉄の橋を渡りきる手前で、すり抜けてきた鉄柵の向こうに、老婆たちが、まるでカゴメカゴメをするようにかがみ込んでいるのが見えた。しかし、よく見ると、一人は地面の上に倒れている。

「どうしたあ？」

茶弥は小走りに橋を渡りきり、三人のもとに駆けつけ

た。

慌てたので、柵をすり抜けるとき、ズボンのポケットを引っ掛けて派手に破いた。太腿に痛みを覚えたが、そんなことは構ってられない。

「どうしたあ？」

「先生、大変だあ。千代さんが、千代さんが……」

絹江がかすれた声で叫ぶ。

千代はうずくまるように倒れ、口から泡を吹いていた。

「どうしたんです」

「化け物が……化け物が……」

絹江がうわごとのように言った。

「堀さん、どうしたんですか。何があつたんです？」

平常心を完全に失っている絹江を諦め、茶弥はタツノに訊いた。

しかし、タツノは視点の定まらない目で、無言のまま宙を見据えているだけだった。

■ 9 ■

朝の早い田舎町とはいえ、まだ大半が眠りについてい
る午前五時半。栃木県大岩船町おおいわふねまちのはずれにある天徳丸国
際カントリークラブでは、町の商工会の幹部四人が早朝
ゴルフを楽しんでいた。

四人はこのゴルフ場経営者とも懇意にしている、時折、早朝割引が始まる六時よりもさらに前に、ほとんどただ同然でコースを回らせてもらっている。

まだ完全に夜も明けきらない、朝靄あさぎりがたちこめるコースを、二番ホールにまで進んだときだった。

「あつ、危ない！」

自分が打った白球を目で追っていた小肥こぶとりの中年男が思わず大声を上げた。

ゴルフボールが小さくなつていくフェアウェイの向こうを、背の高い人影が横切つていく。

一緒にラウンドしていた仲間たちも、みな人影に気づき、ボールのゆくえを目で追った。

打球は緩やかな弧を描きながらその人影の方向に飛んでいったが、数メートル横に逸れてラフに入った。

しかし、安堵のため息をつく間もなく、改めて各人の視線がその人影に注がれると、今度は全く別の種類の緊張が走った。

そして数秒間の沈黙……。

「なんだあれは？」

ようやく口を開いたのは、近くのものは見えずとも、まだまだ遠くのものを見る目は確かだと開き直っている、文房具卸し問屋の社長だった。

彼がそう言ったので、ようやく他のメンバーたちも、自分たちの目がおかしいわけではないことを確信できた。百メートルほどかなたで一瞬歩みを止め、こちらを向いたその相手は、シルエットとしては人間に違いなかった。

直立し、二本足で歩いているから、少なくとも犬や牛ではない。

しかし、あんな人間がいるものだろうか？

遠くて正確には分からないが、背は異様に高いようだ。髪は肩の下まで伸びている。

身体には薄茶色の毛皮をまとっている……いや、よく見れば、どうも衣服ではない。毛足の長い体毛のようだ。しかも類人猿のように密生しているわけではなく、毛の間からは皮膚が透けて見えている。全体に薄茶色に見えたのはその皮膚の色だった。その証拠に、毛の間からは、乳房や、そこだけ黒々と密生した陰毛も見える。

………ということは、女なのか？

一同は暫く呆気にとられてその異様な姿の女を見ていたが、女のほうは歩みを止めることもなく悠然とフエアウェイを横切ると、やがて雑木林の中に消えていった。

彼らが息を切らしてその場に駆けつけたときは、女の姿は消えてしまっていた。

ゴルフ場に隣接している雑木林は、それほど深いものではない。下草の背も大したことはなく、大柄な女がすっかり身を隠せるとも思えなかった。まさに「消えた」としか言いようがない。

「おおい」

一人が大声を上げた。

林の中からは、風に揺れる草木の音がかすかに聞こえてくるだけだった。



「……それで、確かに女性だったわけですね？」

「ああ、間違いねえ。オッパイだってしっかり見えたし、それに……なあ……」

「うん、絶対間違いねえなあ。身の丈はでかかったけど、あれは間違いなく女だんべなあ」

「他に誰か目撃された方は？」

「ゴルフ場のグリーン・キーパーやってる鈴木さんがやつぱし見たって言ってたな。明け方、グリーンの手入れしてるのときに見たって。でも鈴木さんは女かどうかは分からなかったって」

ワイドショーのリポーターの質問に、北関東なまりのきつい中年男二人が得意げに答えているテレビ画面を、

石橋松夫はメモを取りながら見ていた。裏で放送中の同じようなワイドショーはビデオに録画している。それも後でしっかりと見るつもりだった。

栃木県大岩船町。人口一万人ほどのこの目立たない町が、今、「山女」騒動で全国から注目されている。

目撃者は既に数十人に達していた。

「いやあ、たまげたよお。ドラえもんの描いてあるピンクの弁当箱持つて。そんな中によつといミミズがウウウヨ入ってたんさー。そんでさ、それを手づかみでむしやむしや食べてたの。もーオ、おっかなくて、心臓が止まるかと思ったア……」

そんなことを興奮気味に喋る中年女性もいた。

ワイドショーのコメンテーターとして出演していた劇作家は、したり顔でこう解説した。

「何らかの理由で精神状態に異常をきたした女性ではないでしょう。付近で女性の失踪事件がないかどうか調べて、早めに保護したほうがいいでしょう。裸も同然のようですし」

それに対して、社会学者という肩書きの男が反論する。「私はその可能性は薄いと思いますね。相当な山奥ならともかく、栃木のゴルフ場や雑木林で見かけたというのでしょうか？ 保護されないというのはおかしいですよ。」

これは多分、デマでしょう。以前都市部で流れた『口裂け女』の類のね」

二人の論争はしかし、それ以上発展するでもなく、司会者が曖昧にまとめあげると、番組はそのままCMに入ってしまった。

CMが明けると、話題は突然、今売り出し中の女性シンガーソングライターと有名政治家の娘婿である医者との不倫騒動に変わっていた。

なんと中途半端な！

松夫は心の中で舌打ちしながらリモコンを操作してビデオを巻き戻すと、今度は裏でやっていた番組のほうを見た。

こちらは少し違う角度からこの話題を取り上げていた。まずは地元で八十年住んでいるという老婆が登場し、「あれは山女だ」と断言した。

「昔はおつたんじゃよ、ふいつと家を出て、山に入ったつきり帰つてこん女がよ。気が狂うてしまったんか、山の神様だか鬼だか呼んだんか、とにかく山女つうのはときどきおつたもんじゃよ」

それを受け、自称「超常現象研究家」という白髪の老人が出てきて、日本の山姥・山女伝説の解説をし始めた。

「確かに明治、大正の頃までは、時折こうした話はありませんでしたよ。腰に葉っぱでできた糞かをまとっただけの裸に近い格好で、タヌキや野鳥を捕まえてバリバリ食っていたなどという話が。ほとんど石器時代のような生活をしているわけですが、そういう人種が山に棲んでいたというんではなくて、里から鬼にさらわれたり、あるいは発狂して山に入ってしまった女が次第にそういう野性味あふれる山女に変わっていったということなんです……」

この男の話もどうも脈絡が目茶苦茶だ。鬼にさらわれたのと、発狂して狼女のように変身したというのでは全く違うではないか。そもそも、その場合の「鬼」とは何だ？

松夫は不満をつのらせながらも、男のコメントをメモした。

松夫は雑誌のフリーライターをしている。オカルトや超常現象を扱った雑誌『ビヨンド』には創刊から書いているが、三十も過ぎてそろそろもっとメジャーな媒体で名を売りたいという欲も出てきた。

しかし根っからのオカルト好きは容易には直りそうもなく、社会派ルポライターへの脱皮を目論んで事件を物色しているうちに、この「山女事件」に興味を持ってしまったのだった。

社会学者の言うように、これだけ目立つ格好の大女が保護されずにいるというのはおかしい。かといって、単なる噂話やデマの類だとは、どうしても思えないふしがある。目撃者は地元の中高年の人たちが多く、目撃談も真に迫っていた。

松夫は、もし山女が実在するのなら、もう暫くは保護しほろされないでいることを願っていた。

山女の正体は自分が暴いてみせる。そしてそれを機に、ライターとしてのステイタスを上げるのだ。

松夫は現地へ取材に行く準備を進めた。

■ 9 ■

「寺参りの女性死亡」。「山女」目撃のショックか

県下大岩船町の大岩船山山頂にある大巖寺（たいがんじ）境内で、参拜中に突然倒れ、救急車で運ばれた女性が一週間の昏睡状態の末、昨夜大岩船町の町立唐丸病院で死亡した。

亡くなったのは東京都台東区清川の三国千代さん（六九）。三国さんは去る三日午後四時半頃、友人三人と一緒に大巖寺を参拝していたところ突然心臓発作を起こして倒れた。同行していた堀タツノさん（六三）の話によれば、霧の中から突然裸の大女が現れ、千代さんはその異

様さに驚いて気絶したという。

当初は事故として処理されたが、その後の大岩船町周辺で起きた「山女」騒動との関連もあるのではないかと見て、大岩船署では事件として改めて捜査することも検討している模様――

大岩船山参道入口にある茶店の隅のテーブルで、石橋松夫は地元新聞に載ったこの記事の切り抜きをもう一度読み直していた。

中央のテーブルではテレビ局の取材スタッフが撮影機材を片付けているところだった。松夫がこの茶店に着いたときにはちょうどこの局の取材が終わったところしかかったが、店のおかみは、もう何度となく繰り返し返したであろう話を松夫にもしてくれた。

「いんやあ、気の毒にねえ。あたしらも天気が崩れ始めていたんで心配してたんですよ。いつまでたつても下りてこんしねえ。そうしたらおばあさんが一人で息切らしてやってきて、『救急車呼んでください』でしょう。もう、たまげてねえ。すぐに近所の人集めて、山に登って、気を失っていたおばあさんを下ろしたんですよ。」

亡くなったんだねえ……。あのときは普通の心臓発作か何かだと思ったんだけど、山女を見て気絶したんだね

え。気の毒にねえ。

山女も、悪さしないなら町起こしになっていいだなんて、みんなで笑ってただけでも、こういうことがあるとねえ……」

そう言いがらも、おかみは、野次馬客が増えて店が繁盛するのはまんざら悪くないという顔をしている。

テレビ局のスタッフはやがて引き上げていった。

店の中に落ち着きが戻るのを待って、松夫は店のおかみにさらにいろいろと質問をした。

おかみは元来話好きと見え、よく喋ってくれた。

「このお山はもともと天狗さんのお山なだけどねえ。天狗さんが出るならともかく、山女っていうのはねえ……。」

でも、昔は悪い天狗が里から若い女をさらって行って山女にしたって話があららしいですよ。天狗というのは男ばかりだから、ときどき女をさらうんだって。それで次から次へと子供産ませて、その子供を食っちゃもうっていうんですけどね――

「とんでもない奴ですね。そんな怪物を祀っているわけですか、ここの山頂の大巖寺というのは？」

「いやあ、今言ったのは天狗界の中でもいちばん下つばの、外道天狗のことですよ。天狗界にもいろいろ階級が